

[研究論文]

## 小学校低学年の歌唱指導における「どなり声」 の解消法に関する考察

—実践事例に見られる傾向について—

### A Consideration of Methods to Prevent “Shouting” in Voice Education for the Lower Grades of Elementary School

—Tendencies Found in Field Studies—

奥田順也

Junya Okuda

〈抄 録〉

小学校低学年の歌唱指導において、「どなり声」による歌唱が問題となる場合が多い。「どなり声」は歌唱表現に適さないだけでなく、声帯を傷つける可能性があり身体的な危険を伴うことから、「どなり声」に関する先行研究は数多い。しかしながら、低学年における歌唱活動に対する考え方は一定の見解を得ておらず、その指導法も様々であった。

そこで本研究では、「どなり声」の解消法についての先行研究を検討し、分類することによって、指導法に大きく二つの傾向が見られることを明らかにした。その上で、低学年の歌唱指導に必要なと考える条件を三つ提示し、これらの条件をもとに「どなり声」の解消法に対する基本的な考え方を提案した。

キーワード：低学年、歌唱指導、どなり声、地声

#### Abstract

Children’s “shouting-like singing” is an important issue in the practice of teaching singing in the lower grades of elementary school. This “shouting” is not only unsuitable for musical expression but can also result in the physical risk of damaging the vocal cords of children. Although previous studies have discussed the “shouting” issue, no notion or theory has been commonly accepted; various approaches have been attempted, but no method has been established as the standard. In the present study, approaches to prevent “shouting” are divided into two groups by reviewing these preceding studies. Through this analysis, this work presents the three necessary conditions for handling singing lessons in the lower grades. Further, a new basic concept is proposed based on these conditions to establish methods for preventing “shouting.”

Keywords: lower grades of elementary school, vocal instruction, shouting, natural voice

## はじめに

学校教育現場における小学校低学年（以下「低学年」とする）の歌唱指導において、最初に直面する可能性が高いのは「どなり声」の問題である。歌唱時における「どなり声」とは、自己表現要求の強い小学校低学年の子ども（以下「子ども」とする）が発する傾向にある、過度の音量による地声のことである<sup>1)</sup>。この「どなり声」による歌唱は、一見すると活気のある歌唱を引き出すには有効のように感じられるが、子どもの声帯を中心とした身体に負担を与えるものであるため、次第に歌うことに辛さを感じさせていくことになる。また、小学校中・高学年（以下「中・高学年」とする）以降になると、「どなり声」のままでは、より高度になっていく歌唱活動がしにくいことに気付き、次第に歌唱に対する意欲を失っていくことにつながりやすい。これらの結果として、歌うことの嫌な子ども、ひいては音楽嫌いな子どもを生み出す結果を招来することにもなりかねないのである。そのため、「どなり声」を問題とした先行研究は、以下に述べるように数多くある。しかし、低学年における歌唱活動の考え方は一定の見解を得ておらず、その指導法も様々である。

そこで本研究では、「どなり声」の解消法について、先行研究をもとに再考と提案を行う。まず、教育雑誌や学会誌に掲載されたものを中心に先行研究の検討を行い、現在までに提案されている「どなり声」の解消法を分類し、考察を行って筆者としての見解を示す。その上で、今後のさらに有効な解決法の確立に向けて、基本的な考え方を新たに整理して提案し、本稿の結論としたい。

## 1. 「どなり声」を解消するための先行研究の検討

先行研究の検討にあたり、各研究の中でこれまでに提案されてきた指導法における着眼点から、大きく二つに分けた。一つめは「指導者を対象とした研究」、二つめは「子どもを対象とした研究」である。ここではこれらをさらに分類し、“ ”内に示す名称を付けて以下のようにまとめた。

### 1.1 指導者を対象とした研究

#### 1.1.1 “歌唱指導に対する心構え”について

細田（1993）の研究は、本研究の対象である小学校低学年ではなく、幼稚園、保育園の現場を主な対象とした内容だが、歌唱としては同じ「どなり声」をテーマにした指導法なので、同じく検討したい。

細田は、子どもが「どなり声」による歌唱を行う原因を三つ述べている。そのうちの一つは、声の質に関して、親や教師、すなわち大人の意識が低く、「どなり声」を「子どもらしくていい声だ」など、肯定的に捉えていることである。二つめは、指導者が、子どもをどのような声に導くべきなのかというイメージができていないことである。この場合、指導者が子どもがどんな声を出すことができるかを知らない可能性もあることを挙げている。細田はこの二つの原因に対し、「子どもにとって自然で美しい声とはどんな声なのか、どんな声で歌わせたいのか、というイメージを持つことである」<sup>2)</sup>と述べ、歌唱指導を行う指導者の感性により、子どもの歌声の方向性は決まるとしている。

#### 1.1.2 “指導時の言葉かけ”について

蓮沼（2013）は、「大きな声で」や「元気よく」等、子どもが指導内容を勘違いしてしまう可能性のある言葉かけはしないことを提唱している。もし歌唱が「どなり声」になっていた場合、まずその声は美しいか汚いかと問いかけ、次に歌唱する時には、美しい声を心掛けるよう指示すると子どもの

歌声は変わるとの見解を示している。同様に、西谷（2009）は、「どなり声」による歌唱の原因の一つに、教員の「元気に歌いましょう」の指示に子どもが応えようとするがゆえであることを挙げている。実際の指導法としては、「怒鳴り声の歌はどんな感じがするかな？」「この歌に怒鳴り声は合うかな？」「怒鳴り声で気持ち良い歌になるかな？」「怒鳴って歌うと喉がどうなるかな？」という言葉かけを行うことを挙げている。また、もしその原因が発散的な要因である場合は、一回だけどなりたい人はどなって歌ってもいいという指導を行うことも挙げている。この指導は、一度、子どもの欲求を発散させることで気持ちを落ち着かせることをねらいとしている。細田（1993）は、「子どもらしいことと元気なことは、大声で歌うことと同じではないことを認識している指導者であれば、『元気に歌いましょう』という言葉かけはしないはずである』<sup>3)</sup>と述べている。これらの事例は、「どなり声」による歌唱を、教員が誘発する可能性を示しており、前述した“歌唱指導に対する心構え”と同様に、歌唱指導を行う者の感性により、子どもの歌声の方向性は決まることを示唆している。

一方、抽象的な言葉かけをよしとしない考えもある。花井（1982）は、低学年の指導する際、「かわいい声で」等、抽象的な言葉を使わず、分かりやすく具体的な言葉で、実践しやすい内容を指導すると提案している。

### 1.1.3 “歌う意欲”について

「どなり声」を解消するための記述の中には、低学年の歌う意欲について警鐘を鳴らしている主張も見受けられた。蓮沼（2013）は、1年生は幼稚園や保育園で歌ってきたように歌うが、歌の意欲は認めた上でその意欲は削がず、「どなり声」を修正する必要があるとしている。また、池田（1976）は、元気に大きな声で、精一杯歌い、時に堅い声で音程も定まらない一本調子の低学年の歌唱について、このような歌唱は音楽表現とはかけ離れたものとしながらも、楽しそうな表情、体中でリズムに乗る様子等、音楽に浸り、その中で自己を表現させていくことが、歌唱の出発点と述べている。また彼は、この時期に声が汚い等、表現意欲を失うような指導ばかり行わず、まず自由に歌わせ、音楽の楽しさを実感させることが大切だとしている。江畑（1969）は、極端に顔を真っ赤にしながらどなっている場合を除くとした上で、低学年に弱声や頭声という指導を要求することにより、子どもの表現意欲を減退させ、歌心を失わせてしまうと警鐘を鳴らしている。また少々、乱暴であったとしても、教材に合わせてのびのび歌わせることが、中・高学年で学習する正しい自然な発声への段階的指導であると述べている。また、川野（1976）も低学年に発声について細かく指導することは、歌唱への意欲を削ぐことに繋がるとの見解を示している。歌う意欲を大切にする考えは一致するものの、実際の指導法はそれぞれ異なる。

## 1.2 子どもを対象とした研究

### 1.2.1 “歌唱時の心構え”について

青木（2012）は、自己表現要求の強い子どもによる、いわゆる「どなり声」を解消するために、「音楽とは、美しい音で周りの人たちを心地よくさせるものだ』<sup>4)</sup>ということと、「自己満足だけの音楽だけではいけない。自分も楽しみ他の人も楽しめる歌をうたうことが大切だよ』<sup>5)</sup>ということ子どもに話し、理解させることを必要だと述べている。

### 1.2.2 “聴くことを重視した指導”について

蓮沼（2013）は、まず聴くことを前提とした小さい声で歌わせ、いきなり大きな声で歌わなくていいこと、楽に歌っていいことを指示するとしている。小さな声で歌唱することで、どなっているのは聞

こえなかった周りの声が聴こえるようになるとの見解を示している。蓮沼は2004年から開始した『教育音楽』の連載時に1年生の指導に関わっており、2005年3月号では、元気に精一杯歌うことにより、音程が外れてしまうこと、また、自分の声が聴けなくなっていることと同様にピアノの音を聴きながら歌うことができなくなることを問題点にしている。つまり彼は聴くべき対象を、自分の声、周りの声、伴奏の音としていると考えられる。また、この指導により、歌声が揃ってきたら、次第に声量を上げていくとしている。ここで取り上げた小さな声を出発点とする指導は、後述する“声量”と相互作用する指導法といえるだろう。聴くという指導法は他にも見られる。伊藤（1963）は、子どもにどなり声は美しくないと悟らせるため、お互いの歌を聴き合う機会を作るという指導法を提案している。東京都教育研究員研究報告『学習開始期の基礎指導』（1968）の第2節発声指導の中では、「エ、児童のよい歌い方を範唱として聞かせる」<sup>6)</sup>という指導法が報告されている。これらの指導は、聴くことにより、よい歌い方に気付かせ、低学年の子どもが得意とするであろう模倣を促す指導といえるだろう。また聴くことを主とした指導に関連して、細田（1993）は、「一日の生活の中で、静かに耳を澄ますことの出来る時を積極的に作り、聴くことのできる耳を育てる」<sup>7)</sup>と述べ、歌唱指導の際も、静かな環境作りから出発すべきだと提案している。

### 1.2.3 “曲想に合った歌唱”について

西垣（1976）は、2年生の実践事例を取り上げている。これは《さんぽ》<sup>8)</sup>を歌唱する際、どなって歌わせないために、「小鳥」という歌詞に関するイメージ、鳴き声等、曲のイメージを共有することで、どなって歌う子どもはいなくなったという事例である。この事例により、過度に「どなり声」で歌唱する子どもは、歌唱表現とは無縁の声を発している場合があるということが示唆される。曲相に関するものとしては他に、東京都教育研究員研究報告『学習開始期の基礎指導』（1968）第2節発声指導の中で、「ア、大きな声を要求することは避け、教材の曲相により『やさしく』『そっと』『かわいい』『軽くはずむように歌いましょう』などのことばで指示し、歌わせる」<sup>9)</sup>という報告がある。

### 1.2.4 “声量”について

渡辺（1989）は、まず低学年は、学校生活に慣れ、歌唱においては、歌っても笑われない環境を作ることが大切であると述べている。そのために、低学年から美しい歌唱を目指すという自身の信念と相反するとしながらも、1、2ヵ月の間は「どなり声」による歌唱は必要だとしている。この理由について渡辺は、「・大声で歌い合う中で学級の友達と仲良くなること。・大きな声を出す中で、自分を大いに発散すると共に、どんな声を出しても恥ずかしくないことを経験させること」<sup>10)</sup>と述べている。その後、改めて歌唱指導の機会を作り、教員の裁量により、歌い方を全面的に方向転換するなど、順次、子どもに合わせ歌唱指導を行うべきとの見解を示している。比嘉（2012）は、歌やピアノが苦手とする学級担任の教員でも行えるよう、教室に掲示できる「声のものさし」を活用する指導を提案している。これを活用する場合、「声のものさし」に示された声量の基準が、どのくらいの大きさか歌唱する前に予め示した上で、ボリューム0は口パク、「声のものさし」を見ながら次第に1から2へと移行し、適切な声量に導く。この指導は、前述してきた耳の感覚や肉体的な脱力に加え、視覚的にもアプローチができるため、効果的な指導法と考えられる。飯島（2007）は、どなって歌う原因の一つについて、発声が歌声の発声ではなく大声で叫ぶような発声になっているからだ述べている。その場合、喉の力を抜くことを指示し、必ず教師の範唱を聴かせるという指導法を挙げている。さらに喉の力を抜くために、少し高めの音を *mp*（メゾピアノ）くらいの声量で歌いながら、脱力して首を左右に振ることも効果的だと述べている。感覚的なアプローチに加え、脱力から効果を得ることで、身



体的に声帯に負担をかけさせないように指導する事例といえるだろう。また、“聴くことを重視した指導”で取り上げた、蓮沼の小さい声を出発点とする指導は、この“声量”の指導にも当てはまると考えられる。

### 1.2.5 “音域と調性”について

三渡（1986）は、低学年が「どなり声」で歌う原因の一つは教材にもあると述べ、歌うために適した調性に移調することにより、無理なく素直な声で歌うことができると提唱している。池田（1976）は、“歌う意欲について”で取り上げた自由な歌唱は初期段階とし、続いて表現技能を整えるため、次の指導を挙げている。子どもにどならないように指導した上で、歌いやすい比較的、低い音域の調性から歌い始め、学習状況に応じて、順次、調性を上げていくことで、無理のない歌唱をさせるというものである。池田は低い音域からのアプローチを挙げているのに対し、山田（1965）は、高い音域による指導を提案している。山田の指導は、地声で上がりきらない高い音（二点ニや二点ホ）を発声させることで、地声による過度の声量を出させないことを目的としていると考えられる。この指導は、中・高学年で扱われることの多い「頭声的発声」<sup>11)</sup>のための指導と類似している。また、移調による歌唱を発声練習として扱う事例もある。永野（2007）は、どならない歌い方を定着させるために、歌唱教材を移調して歌唱することを発声練習とすると述べている。移調の目的を高い音や低い音を歌うためと限定せず、同じ曲を無理のない範囲で色々な調で歌唱することで、歌唱に適する歌い方を定着させることがねらいであろう。

### 1.2.6 “模倣による発声指導”について

後藤（1987）は、「どなり声」を解消するために、地声では発することができない、動物の鳴き声を模倣させる指導を挙げている。この指導は、中・高学年に「頭声的発声」の指導を行う事例の中でも見受けられる。また、“聴くことを重視した指導”でも挙げた、良い見本を聴かせて真似させる指導も、この“模倣による発声指導”だといえるだろう。

### 1.2.7 “朗読からのアプローチ”について

桜井（1981）は、歌声の指導は国語科の指導が効果的だと考え、朗読により声を揃えることで、子どもが「どなり声」による歌唱をすることはなくなると述べている。学級担任の教員だからこそできる、合科的なアプローチといえるだろう。

川野（1976）は、歌唱する前に、歌詞の読み方を工夫する指導を提案している。例えば、「おつかい」「みんなで」という歌詞を読み、次に「おつうかあい」「みいんなあでえ」と母音を加えた歌詞を読ませ、その後、歌わせると「どなり声」が影を潜めるという指導を挙げている。この指導に関して、明確な意図には触れられていないが、おそらく、母音を意識して発音することで、言葉一つ一つを丁寧に発音することをねらいとしていると考えられる。

## 2. 考察

先行研究を分類し整理したところ、主に“音域と調性”に関する指導法で見られたように、「どなり声」を解消するための歌唱指導法に大きく二つの傾向があることが明らかになった。一つめは、移調等により、地声では歌えない高い音での発音、歌唱を促すことで、「頭声的発声」に導くことをねらいとした指導である。二つめは、実態に合わせて、子どもにとって歌いやすい調性に移調することで、無

理なく素直な声での歌唱へと導こうとする指導である。これら二つの指導を比較すると、同じ「どなり声」を解消するための指導であっても、指導者がその先に描く歌唱活動の展望によって指導法が異なってくる、ということが分かる。ここでは、それぞれの指導について考察した上で、さらに、どちらの展望が低学年の歌唱活動に適しているかについて考察を行う。

## 2.1 「頭声的発声」へと導く指導

まず、高い音域に移調することで、「頭声的発声」に導くことをねらいとした指導について考察する。「どなり声」とは、過度の音量による地声のことなので、生理的に過度の音量は出せなくなり、「どなり声」は解消されるであろう。しかし、「1.1.3 “歌う意欲”について」で述べたように、子どもの「どなり声」には、歌唱において必要とされる「自分を表現したい」という欲求が含まれる。確かに、「どなり声」での歌唱は非音楽的であり、歌唱に適する声ではない。しかし、「どなり声」が解消されたとしても、その歌声に表現したいという意欲が失われては意味がない。つまり、ただ自己表現要求を抑える形になってしまわないよう、あくまで子どもが自己表現要求をコントロールできるようにする指導が重要であり、そうすることで、「歌う意欲」が高められると考えられる。したがって、「頭声的発声」へと導く指導では、元々「歌う意欲」が十分でなかった場合、「どなり声」とともに、表現する意欲も失う可能性が示唆される。まずは自由に思うまま歌わせてから、「頭声的発声」へと指導法を転換するという考え方も見られたが、成果を出すためには、かなり高い指導力が求められる。また、技術的な要素を求められる「頭声的発声」に導く指導を行うにあたり、細かい指導によって歌う意欲を削ぐことになりかねない。

子どもを「頭声的発声」に導くことによる弊害は他にもある。それは、音楽科における授業で行われるリズム学習や器楽活動への影響である。音楽の授業内容が歌唱活動のみであるならば、子どもを「頭声的発声」へと導いても問題ないかもしれない。しかし、音楽科の授業において、歌唱は「リズム」「メロディー」「ハーモニー」という音楽の三大要素を学ぶための学習形態の一つであり、当然ながら、歌唱活動だけを行うわけではない。例えば、小学校1年生の教科書歌唱教材《しろくまのジェンカ》では、ジェンカ<sup>12)</sup>のリズムを学習するために、歌唱をしながら遊びを取り入れた全身を使う身体表現を行う。このような快活なリズム学習において、呼吸法やフォームなどの繊細な技術を求められる「頭声的発声」による歌唱を同時に行うことが、はたして低学年にとって本当に望ましいのだろうか。器楽活動においても弊害がある。低学年では、範唱と模唱による学習を主としており、読譜の学習は小学校中学年より徐々に開始する。したがって、低学年で鍵盤ハーモニカ等の器楽を学習する場合、楽器を演奏する前に必要な階名の指導も、範唱と模唱によって行われる。その場合、「頭声的発声」に導く手段として行われていた移調で意図的に避けられていた低音域の階名唱は、どのように行うのだろうか。本稿で検討した先行研究の中には、これらの起こりうる弊害の対処策に触れているものはなかった。

しかし、「頭声的発声」に導こうとする傾向が、必ずしも弊害だけをもたらすわけではない。この傾向の利点としてまず挙げられるのは、「聴く」という指導が行いやすいことである。「どなり声」による歌唱では、声を張り上げることに夢中で、周りの音はおろか自分の声さえ聴いていない可能性がある。だが、「頭声的発声」では、生理的に必要以上の大きな音量が出にくいので、歌いながら周りの声やピアノ等の伴奏の音を聴くことができる。これは「1.2.4 “音量”について」で挙げた、小さな声を出発点とする指導と類似した効果だといえるだろう。また、「頭声的発声」による歌唱のモデルは多いため、指導者が子どもの歌声をイメージしやすいことも利点として挙げられる。なお、“模倣による発声指導”も、この「頭声的発声」へと導くことを目的としていると解釈できる。

## 2.2 「無理のない素直な声」による指導

次に、歌いやすい低い音域に移調することで、無理なく素直な声での歌唱に導く指導について考察する。まず、この指導における「無理なく素直な声」の意味することについて述べる。「頭声的発声」に導く指導では、地声で発することのできない音域で発音、発声を促すことに対し、この傾向では、歌いやすい低い音域に移調するとしている。すなわち、この傾向における「素直な声」とは地声を意味している。教育現場において、地声＝「どなり声」と解釈されることが多い。しかし、『音声大辞典』（1976）では、地声のことを「裏声の対語。人間が特に努力せずに楽に発声できる高さの声。つまり、『地（持ち前）の声』」<sup>13)</sup>と解説している。つまり、努力せず楽に発声できる声とは地声のことであり、「無理なく」とは地声で発することができる比較的低い音域を指すと考えられる。したがって、この指導は、地声で歌える音域による歌唱指導を指すものと見てよいだろう。「頭声的発声」に導こうとする指導と、無理なく素直な声での歌唱に導く指導は、「どなり声」を解消するために音域を重視するという点では共通している。しかし、無理なく素直な声での歌唱に導く指導では、発声法そのものを指導するのではなく、必要に応じて歌いやすい音域に移調し、持ち前の声で声量をコントロールすることで「どなり声」を解消する。そのため、「どなり声」の解消後に行われるのは地声による歌唱活動だと示唆される。この歌唱指導は、楽に発声できる音域での歌唱を前提としているため、前述したリズム学習などの歌唱を伴う学習にも適していると考えられる。また、コントロールされた適切な声量での地声による歌唱活動を充実させることで、子どもが声を発する満足感を得て、自己表現要求を「歌う意欲」に繋げることも可能であろう。また、声量をコントロールすることにより、結果として周りの音を聴くこともできると考えられる。

一方、「どなり声」と地声は発声法自体に明確な違いがあるわけではないため、適切な声量を指導することが難しい。すなわち、指導者が子どもの歌声についてより明確なイメージを持つことを求められる指導といえるだろう。

なお、発声法に明確な違いがないという点において、朗読＝地声と考ええると、“朗読によるアプローチ”で挙げた指導も、この無理なく素直な声での歌唱に導く傾向と同じ方向性を持っていると考えられる。

## 2.3 「どなり声」を解消する指導のための三つの条件

これまで、「どなり声」を解消するための指導法に見られる二つの傾向について考察してきた。その結果、「どなり声」の解消法の傾向が二つに分かれる原因は、「どなり声」の解消後の低学年の歌声のイメージをどのように捉えているかによって異なるからだと考えられる。また、考察の中で取り上げた利点と弊害を整理すると、「どなり声」の解消法には以下の三つの歌唱活動が必要な条件であると考えられる。

- ① 「聴く」ことができる声量による歌唱活動
- ② 自己表現要求を「歌う意欲」へと高める歌唱活動
- ③ 単に歌唱活動としてのみでなく、音楽科の授業全般を包括した歌唱活動

これら三つの条件を踏まえれば、二つの傾向のうち、後者の「無理なく素直な声での歌唱に導く指導」、すなわち「適切な声量での地声による歌唱」が、今後あるべき「どなり声」の解消法に対する基本的な考え方であると筆者は考える。

この「適切な声量での地声による歌唱」は、中・高学年に繋がる「段階的な歌唱指導」という視点で捉えても、地声による歌唱を出発点として、子どもに適した段階的な歌唱活動を行い、達成感を積み重ねることで、「歌う意欲」の向上を望めるものであるといえるだろう。さらに、この「歌う意欲」



はより技術を求められる「頭声的発声」を習得するための原動力となり、中・高学年で行われることの多い高度な合唱活動へと無理なく繋げることができると考えられる。

「頭声的発声」が合唱活動にとって適している発声法であることに疑いの余地はない。一方で、現在は教科書教材においても、ミュージカル、ポピュラー音楽、日本伝統音楽など、地声による歌唱活動のジャンルも多様化してきている。したがって、中・高学年では「頭声的発声」を主とした合唱活動を通して、時には低学年で経験した地声による発声で他のジャンルの歌唱活動も行って歌唱の技術と意欲の向上を図ることが必要とされている。このことから、低学年において「どなり声」を解消する段階でまず地声による適切な歌唱指導を行うことが、「自然で無理のない、響きのある歌い方」への「段階的な指導」に繋がると考える。

### 3. 結論と今後の展望

本論では、「どなり声」を解消するための指導法について、先行研究の検討と考察を行ってきた。「どなり声」を解消する実践事例の中には、有効性を認められる指導が見受けられるものの、その方向性は一定の見解を得ていない。すなわち、「どなり声」を解消した後どのような歌唱指導や発声指導を行うことを前提にしているかで、その指導法は異なるということである。その方向性の違いとは、「どなり声」の解消後に指導者が目指さんとする、歌唱指導の方向性、あるいは発声指導の方向性の違いに基づいたものである。低学年の歌唱指導では、まず「どなり声」を解消し、次の段階においては、単に歌唱の技術の習得を目的とするのではなく、歌唱活動を含めた低学年の音楽科の授業に適する歌唱指導が必要だといえるだろう。また、この歌唱指導は、歌う意欲を育てつつ、低学年に無理のない範囲で、中・高学年に繋がる段階的な歌唱指導でなくてはならない。

筆者は本稿での考察を通じ、「どなり声」の解消法について必要な三つの条件を提示した。これらの条件を踏まえ、本稿の結論として、小学校低学年の歌唱指導における「どなり声」の解決法に対する基本的な考え方は、無理なく素直な声での歌唱、すなわち、「適切な声量での地声による歌唱」である、と提案する。

この指導法は、低学年の時期のみに適用される限定的な指導ではなく、中・高学年へと繋がる「段階的な指導」になりうるという意味で、有効なものとなると考える。本稿の結果を踏まえ、今後は、低学年の歌唱における、中・高学年へと繋がる「段階的な歌唱指導」の具体的な方法を検討し、実践的な研究を行いたいと考えている。

#### 注

- 1)『平成20年度 小学校学習指導要領解説編』（文部科学省2007）には、子どもが意欲的に歌おうとする傾向がある反面、「か細い声」や「どなり声」など、歌唱活動に適さない声で歌唱を行う場合がある傾向について、以下のように示されている。「低学年の児童は、自己表現の意欲が強く、自分の声を精一杯出して積極的に歌おうとする。そして、自分の歌声や友達の歌声に関心を持ち、魅力ある歌声に接すると、自分でもきれいな歌声で歌ってみたいという意欲が芽生えてくる時期でもある。しかし、ときにはか細い声で歌ったり、逆に友達に負けまいとして大きな声で歌ったりする児童も見られる。」(p. 29)
- 2)細田淳子「子どもの歌唱について—どなり声に関する一考察—」『音楽教育学』第23-2号、日本音楽教育学会1993、p. 22
- 3)細田、前掲書、p. 21f



- 4) 青木敦子「怒鳴り声になる」『教育音楽』2012年5月号、音楽之友社2012、p. 32
- 5) 青木敦子、前掲書、p. 32
- 6) 小根山茂子・折原栄治・近藤登喜子・渡辺節保・相原昭子・森下祐子・矢田元夫・高野一重「学習開始期の基礎指導—発声・リズム感・音程感の指導について—」『教育音楽』1968年4月号、音楽之友社1968、p. 30
- 7) 細田淳子、前掲書、p. 22
- 8) 取り上げた事例の中では作曲者等の詳細な説明は見られないが、「小鳥」という歌詞から、《さんぽ》勝承夫作詞・多梅稚作曲（1947）である推測される。
- 9) 小根山茂子ら、前掲書、p. 30
- 10) 渡辺陸雄『低学年からの歌唱指導—生命力のある美しさをめざして』音楽之友社1989、p. 32
- 11) 頭声的発声について、岩崎（1997）は『小学校音楽指導書』（教育出版1960）を要約して次のように説明している。「高音の発声の要領を活用し、中音域、低音域（胸声区）の美しい発声を指導する。頭声 completes するまで音量が小さく、弱々しいという欠点があるので、共鳴を工夫することによって補う。硬口蓋と軟口蓋の中央部に焦点をつくり、鼻腔の共鳴も加えた柔らかな発声」（岩崎洋一『小学生の発声指導を見直す』音楽之友社1997、p. 10）
- 12) ジェンカとは、古くからフィンランドで伝承されてきたフォークダンスのこと。
- 13) 日本音声学会『音声学大辞典』三修社1976、p. 176

## 参考文献

- 飯島満子「どうする？ 発声指導—Q&Aでスッキリ解決！」『教育音楽』2007年10月号、音楽之友社2007、p. 30
- 池田宏章「どならないで歌わせるには」『教育音楽』1976年4月号、音楽之友社1976、p. 70f
- 伊藤雅子「低学年から歌う習慣を」『教育音楽』1963年10月号、音楽之友社1963、pp. 23-25
- 江畑亀三郎「歌唱の段階的指導 発声指導の問題点とその解決」『教育音楽』1964年4月号、音楽之友社1964、pp. 49-51
- 川野哲男「歌唱指導で気をつけたいこと」『教育音楽』1976年4月号、音楽之友社1976、p. 68f
- 後藤良弘「児童の発達段階を考慮した発声指導の一例」『月刊音楽教育』1987年10月号、東京音楽図書1987、pp. 75-77
- 桜井穆彦「低学年における歌声指導の一方法」『音楽教育』79号、全国音楽教育連合会事務局1981、pp. 26-31
- 永野恵理香「どうする？ 発声指導—Q&Aでスッキリ解決！」『教育音楽』2007年10月号、音楽之友社2007、p. 29f
- 西垣哲夫「歌唱の評価をどうするか」『教育音楽』1976年7月号、音楽之友社1976、p. 26f
- 西谷鐘治「歌唱指導の言葉かけ」『教育音楽』2009年7月号、音楽之友社2009、p. 33
- 蓮沼勇一「長野岡谷市立長地小学校1年生の授業を通して」『教育音楽』2005年3月号、音楽之友社2005、p. 64f
- 蓮沼勇一「『怒鳴り声を、きれいな歌声にしたい』時の言葉」『教育音楽』2013年5月号、音楽之友社2013、p. 46f
- 花井清「一年生のどなり声をどうしましょう」『教育音楽』1982年9月号、音楽之友社1982、p. 64f
- 比嘉智子「怒鳴るように歌って困っちゃう！」『教育音楽』2012年12月号、音楽之友社2012、p. 59f

奥田順也  
Junya Okuda

三渡百合子「低学年の音楽科指導のこころみ」『月刊音楽教育』1986年5月号、東京音楽図書1986、pp. 84-87

山田真市「児童の心理と音楽指導」『教育音楽』1965年11月号、音楽之友社1965、p. 96f